

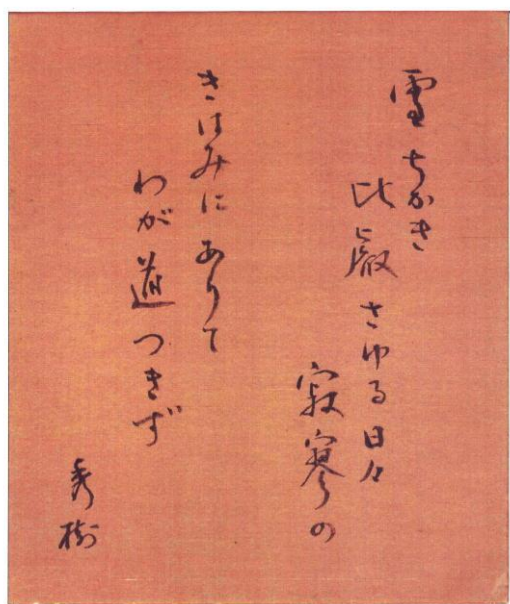
ホームページ 原稿 亀淵氏 湯川博士色紙寄贈

亀淵 迪（かめふち すすむ）氏（小松中学42回生）が、6月3日本校を訪れ、湯川秀樹博士の色紙を寄贈して頂きました。

亀淵氏は、物理学者で理学博士、筑波大学名誉教授、名古屋大学理学部出身で、東京教育大学（現筑波大学）の教官（助教授、教授）となり、同大の朝永振一郎博士の後継者の一人として研究を進められた。専門は、場の量子論、特に、繰り込み理論の研究で知られています。

色紙には、「雪ちかき 比叡さゆる日々 寂寥の きはみにありて わが道つきず」と書かれており、この歌は、湯川博士が、ノーベル賞受賞の4年前に詠まれた歌で、亀淵氏は、湯川博士が、当時、自分の理論が間違っているのか悩みながらも、自分が正しいと信じて研究をつづけた姿勢を詠った短歌と熱く語っていただきました。

今回の寄贈は、湯川博士の色紙で、母校の後輩たちの勉学や研究の励みになればとの亀淵氏の熱い思いが込められています。



湯川先生の色紙について

小松中 42 回生

亀淵 迪
(かめふちすすむ)

湯川秀樹先生のノーベル賞受賞（1949）を記念し、1953 年京大に「基礎物理学研究所」が創設されました。わが国初の共同利用研究所であり、京大だけでなく全国の研究者に齊しく開放されています。創設早々の頃、研究者としてまだ駆け出しだった私も 4 ヶ月ほどここに滞在致しました。その折、所長の湯川先生に書いて頂いたのがこの色紙です。

先生は短歌を能くされ、『深山木』という歌集があります。その p.31 に '昭和二十年も暮れんとして（以下二首）' との詞書きに続く第一首がこの短歌なのです。終戦の年（1945）の暮れのことであり、先生 38 歳の作ということになります。京大物理学教室の湯川教授室からは北叡山が望見されたと聞いています。

ここにある寂寥という言葉にまず着目しましょう。終戦直後のことでもあり、日本人の誰もが精神的・物質的に疲弊のどん底にありました。加えて先生には戦時中に実の父母（湯川は結婚後の姓）の死や、末弟滋樹氏の戦病死という不幸がありました。

しかしながら研究者としての先生には、さらに大きな悩みがありました。「中間子理論」の提出は 1935 年ですが、ほどなくして宇宙線中にそれらしい素粒子が発見されます。しかし理論からの計算値と宇宙線からの実験値とが一致しません。調べれば調べるほど不一致は確かなものとなります。そこで先生は '自分の理論は根本的に間違っているのでは' と悩み始められます。研究者にとって、これ以上の失望・落胆はありません。おおよそ以上のような事情が重なり合つての寂寥感ではなかったか、と私は想像しています。

しかし 1947 年、状況は一転、幸運が訪れます。イギリスの実験で中間子が確かに存在し、宇宙線中に見付かっていたのは全く別種の素粒子であることが判明したのです。つまり湯川理論は完全に正しかったのであり、これが 1949 年のノーベル賞へと繋がったのでした。この受賞が国民に如何に大きな勇気を与え自信を回復させたかは今でも語り種になっていますから、皆さんもご存知のことと思います。

先生はその後、「非局所場」とか「素領域」といった甚だ高邁・深淵な問題に取り組まれます。普通の研究者なら時期尚早とか何とか言って尻込みするような大問題なのです。しかし先生は、他人が何と言おうとも、自らが正しいと信じる問題がそこにある限り、とにかく今出来ることは今やらなくてはならない、との心意気でした。そして生涯の最後の日までその追及を続けられたのです。しかしこの仕事は、結局、未完成のままに残されました。

先生のこうした生き様は、遙かな地に理想を求めて歩み続ける旅人に喩えられましょう。その旅は、しかし、苛酷な冬の旅でした（因みに先生の自伝は『旅人』と題されています）。このような先生の全生涯を象徴するのが、この色紙の一首に他ならないと私は考えます—— 先生 38 歳の作ではありますが。京都知恩院での先生の葬儀の折、私たち参列者に志として渡されたのが、同じ短歌の書かれた色紙の写しでした。遺族の方々も、この一首が先生にとって特別なものであることを、よくご存知だったのです。

この色紙は私の探究心を絶えず鼓舞して参りました。生徒の皆さん方にとっても同様な影響をもたらすことになれば、まことに幸いであります。

(2017.5.15)